「こどもまんなか」を問う 21

フリースクールあるある①

フリースクールに 6 月になって、在籍校の校長や担任の訪問が相続いている。特に 4 月に異動してきた管理職の方々が来られる場合が多い。

「このフリースクールは出席扱いに足る環境なのか」、「スタッフはどういう人がいるのか」、「学習はどうなのか」など見ていく。特に中学校は少し厳しく見ていく傾向があるように思える。

ところで、新任校長はご自分の学校に在籍している児童生徒にフリースクールで初めて対面することになる。お互いに自己紹介している場面は不思議な光景で、毎年行われる恒例行事でもある。こどもたちは頭を下げながら、ちらっと「この人が校長先生か」と見ている。

学校には全く行っていないのに、在籍していることになり、その学校から卒業証書が出されるのはどのように考えても矛盾しているとしか考えられない。最近はフリースクールで卒業証書を出すケースが増えてきている。

中には一回も見にこない学校もあり、自分の学校のこどもであるのに、こんなことでいいのかとも思ってしまう。

昨年度よりフリースクール利用料補助事業が始まり、各学校はフリースクール利用状況を確かめなければならない。そういうこともあり、見に来る校長もいらっしゃるのかと思う。

こどもたちの教育機会の確保の観点から、学校に行けない時は学校外のフリースクールを利用し、元気になればまた学校に行けばいいのではないか、例えば一週間のうち半分はフリースクール、半分は学校のように壁をなくしていくことができればいいのではないかとも考える。

「こどもまんなか」を問う 22

富山県こども総合サポートプラザがスタートして 2 ヶ月となる。富山県こども若者総合相談センターも、富山県児童相談所を核に他の 2 機関と共に連携機関として仲間に入っている。

他の機関がいることで心強い。4 月開所当初、家出青年の相談があり、少年サポートセンターとの連携ができ、虐待案件があり児相と連携ができた。

また連休前後は不登校相談が多く、児相と総合教育センター教育相談部との連携での対応が毎日行われていた。

プラザでは、4 機関の連携を密に行うことでワンストップの役割を果たし、さまざまな困難事例にも対応することが成果につながる。また相談件数の推移にも関心を持たれている。4 月より 5 月は増加傾向にあるが、プラザの周知が今後なされることにより更なる増加につながると考えている。そのため PR カードの配布や出張相談会の開催を準備している。

一方私たち、こ若センターは NPO 法人はぁとぴあ 21 が受託して、他の民間機関との連携で成り立っていてスクラムを組んで、こども若者が抱える課題に対応しようとしている。

不登校の子どもたちは学校にはきていない。ひきこもりの若者は社会に出ていない。そのような制度の狭間にいる方々には制度外を守備範囲にして活動している民間機関の役割が大きいと思っている。

私たち民間ならではの切り口である当事者目線を大切にしながら、富山県では今までになかった取り組みとして、公的機関にはない対応策を提案していきたい。

「こどもまんなか」を問う 23

こどもの中にある大人

良寛さんは、こどもたちと遊んでやっているのではなく、自分がすなわちこどもそのものだったので、こどもたちと一緒になって遊んだと言われている。

宮沢賢治さんは、こどもたちが持つ純粋で素直な眼を通して、大人たちが見過ごしてしまうような世界や自然の

美しさ、そして人間同士のつながりが描いている。
昨年亡くなられた谷川俊太郎さんが 50 年前に書かれた「みみをすます」を読んでいる。みみをすましていると、こんなにもいろいろな音が聴こえてくるのかと思わされる。
昨日の雨垂れの音から始まり、人々の足音、蛇のするするする音、死んでいく恐竜のうめき声、プランクトンにまで耳をすます、いったん耳をすまし始めると、どんどんと日常で聞こえなかった音が聴こえてくるようになってくる、それもはるか昔の時代の音まで、それが自分の産ぶ声、お母さんの子守歌、家族のいろんな音、近隣の音まで聴こえてくる。最後は明日の音にまで耳をすましている。
そんな思いで幼いこどもたちの声に耳を傾けてみると彼らの声が聞こえてくるに違いない。谷川さんは、ややもすると気にとめないこどもの声に耳をすまそう、そうすると彼らの思いが聴こえてくると言っていると思う。
私たち大人は、こどもたちが何も言わないので自分なりに判断して、大人目線で、上から目線になり、彼らの意志を無視した言動や行動になっている。
最近、こども基本法が制定されたこともあり各地でこども権利条例が考えられている。こどもが権利主体になり彼らの最善の利益の保障をうたっている。
ここで課題なのは権利の主体であるこどもたちの意志、つまり考えがどこまで反映されているかである。「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」（Nothing About Us Without Us）ということにならないかが問われている。
今一度原点であるこどもに帰ることが求められる。その時に谷川俊太郎さんがうたってきたことにつながっていく。
こどもたちの声を尊重することが子ども権利条例の中核となるのであり、こどもアドボケイトが児童福祉法改正で盛り込まれた。こどもアドボケイトと谷川さんの思いは共通するものがあると思いながら読んでいる。

「こどもまんなか」を問う 24

フリースクールあるある②
フリースクールのこどもたちが「電車で GO」という活動で、時々射水から富山に来ている。あいの風とやま鉄道「越中大門」駅で富山往復切符を購入し、電車に乗って「富山」駅までいき、駅周辺を散策してくるという活動である。
先日は、富山駅北の牛島北公園で遊び、昼食を CIC にあるファミレスでとり、その後 CIC5F にある、富山県こども総合サポートプラザの見学に来た。フリースクールのこどもたち 10 数名と職員 3 名がやってきて、中を見学して、私のいる富山県こども若者総合相談センターの部屋にも入ってきて、プラザのチラシを持って帰っていった。
いつもフリースクールの中だけで活動しているわけではない。買い物やスポーツ、散策で外に出て行く機会が多い。
その時に出会う人たちは、怪訝な顔をして見ていることがよくある。学校に行っている時間なのに、この子たちは何をしているの?という疑問を投げかけている。もう、こどもたちはそのように思われることに慣れている。
職員が「私たちはフリースクールをしていて、この子たちはそこに所属して過ごしている」と説明すると、「はぁ不登校のこどもだね」と変に納得される。
社会に普通にフリースクールがあり、そこで学習したり、日々過ごしているこどもたちがいることを知っていただくいい機会になると考えている。
今回の通学定期券の件も、フリースクールに交通機関を使って通っているこどもたちがいることを知っていただく機会になったと思う。
東京からすると 30 年も遅れた出来事ではあったが、彼らが普通に安心して暮らせる環境をこれからも作ってい

きたい。

「こどもまんなか」を問う 25

不登校へ高まる関心

今週は 2 日続きで連続してフリースクールと通信高校が報道された。この現象は増加する不登校のこどもたちへの関心の高まりがあるからだろうか。

報道を見られて感想を伝えてくださる方がいつもより多くいらっしゃる印象はある。

フリースクールに通うこどもたちへの通学定期発行の件は、新聞でも取り上げてくれ、テレビでも報道してくれた。

この通学定期についてはすでに通っている場合の交通費軽減は大きなメリットになることと、今通っていないこどもたちへのニュースになると考えている。

フリースクールはまだ県内には少なく、例えばフレンズは射水市にあるが、実は高岡市からも多く通っている。フリースクールは各市内には一つあるかぐらいだから、最寄りにあり歩いて通える小中学校とは違って自力では通えない。両親が共に働きにいくと、送迎ができないなどの理由でフリースクールに通えないという話は多く聞く。その事情を緩和する一つの策になるのではないかと思う。

文部科学省が 30 年前にフリースクールに通う際の通学定期発行を各交通機関に依頼しているのは知っていたが、県内交通各社が対応しているかをお伺いに回った。A 社は全く初耳だと言われ、これは今までにないケースになることが分かった。しかし A 社は対応が早く実習通学定期での対応ができると返答があったのは、やはり不登校のこどもへの便宜をはかろうと考えたのであろう。

この件は、通学定期を使ってまでフリースクールに通っているこどもたちがいることを知っていただくのにいい機会になったと思う。

また 30 年前には東京ではすでに交通機関を使ってフリースクールに通い始めていた。漸く富山でも同じ状況になりつつある。交通事情が都会と富山でははは全く違うので比較はできないが、不登校のこどもに対する支援のあり方が相当遅れているのは間違いない。

次の、高等学校再編と絡めた通信高校をとりあげた報道については、やはり不登校の増加が目立ち社会にも影響を与え、通信高校への関心の高まりに焦点を当てたことによる。

かねてより県内の高等学校中退者が毎年 200～300 人いることをいろいろな場で伝えてきたが関心を持たれなかった印象がある、しかし高等学校再編にはとても大きな課題であり、その現象を踏まえて多様なこどもたちの受け入れができる体制か必要だと考える。

しかし通信高校側からの意見を聞かれることはなく、今回初めて報道が取り上げてくれたことは意義深い。高等学校再編は単に高等学校だけに留まらなく、小中学校も含めた教育全体の再編とつながっていく。再編をやるからには抜本的な改革を断行していく必要がある。

今回、さくら国際高等学校富山キャンパスの生徒たちがインタビューを受けていたが、みんな自分の意見を答えていたのは感動であった。彼らは中学校には行けてなかったが、自分の立場をよく考えている、その結果自分の意志で通信高等学校を選んだのである。

このニュースを見て、真っ先に連絡を下さった方からは「通信高等学校を見下さないで」の発言をよく言ってくれたという内容だった。まだまだ通信高校への理解は低い、中学校での進路指導において通信高校を含めた適切な情報提供がなされていない。中学校不登校のこどもたちに対する親身になった支援体制の整備を願う。

「こどもまんなか」を問う 26

ひきこもる若者たちが後をたたない①

中学校時代に不登校でも次の高等学校がある。しかし高等学校を中退すると、選択肢はほとんどなくなる。

あるケースは、彼は高校 1 年生の時担任とトラブルで不登校となり中退した。

彼は当初学校に戻ろうか、アルバイトしようかと思っていたに違いない。しかしそのチャンスを失ってしまったのだろう。その後 30 数年ひきこもり、現在 50 歳となっている。まさしく 8050 家庭である。このような事例はとても多いのが現状である。

ここで考えなければならないのは、担任とのトラブルというだけの話ではなく、そのショックで 30 年ひきこもることになったのである。

まずは高校中退した生徒たちへの支援体制ができていないのである。昨年度も県内では 296 人中退したが、彼らのその後はよくわかっていない。通信高校への転入は一部で大半はひきこもっていると思われる。

この実態を調査するために高校中退後の追跡調査を実施してほしい。

その調査に基づき、まずは高校中退を防ぐための手立てを確立していくこと、次に中退後の受け入れ先を確立していくことの 2 つが早期に求められる。

「こどもまんなか」を問う 27

私のこどもに対する考え方に影響を与え、180 度大変換するきっかけは次のことである。

①不登校支援に関わる全国ネットワークに参加した中で、2016 年当時教育機会確保法制定前後、早稲田大学で開催されたシンポジウムで「こどもの権利研究」の第一人者である早稲田大学教授の喜多先生により、こどもの権利条例の始まりは第二次世界大戦当時のポーランドでのコルチャック氏の発言からであることを教えられた。

②そのコルチャック氏の著作を読み、こどもへの考え方が一変することとなった。

子どもの権利条約の起点となるヤヌシュ・コルチャック氏のことば

「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である。そう、人間なのであって操り人形なのではない。彼らの理性に向かって話しかければ、我々のそれに向かって応えることもできるし、心に向かって話しかければ、我々を感じ取ってもくれる。子どもは、その場において、我々が持っているところのあらゆる思考や感覚をもつ才能ある人間なのである。」

(「19 世紀隣人愛思想の発展」1899 年)

私がフリースクールの件で相談に来られる親子にたくさんお会いしてきた。またフリースクールに通っているたくさんのこどもたちに会ってきた。そのこどもたちの姿から感じることとコルチャック氏が言っていることが一致していることに気づいたことが始まりである。

③昨年亡くなられた詩人の谷川俊太郎さんの一連の詩、特に「こどもたちの遺言」、「みみをすます」で謳われている「こどもの中にある大人」を見出した谷川さんの姿勢に共感した。

「いやがってるのはちっぽけな私じゃない

幸せになろうとあがいている

宇宙につながる大きな私のいのちです」

ここに人間の尊敬やそれぞれの人間の自由が謳われている、

それはコルチャック氏の思いに共通していると思うからである。

④河野哲也著「教育哲学講義　子ども性への回帰と対話的教育」を、最近、読売新聞の書評で見つけ、カフェで一気に読んでしまった。

「大人が子どもに教えるという意味での教育という営みを解体しなければならない。大人は子どもと共に、子どもから学ぶべきであり、大人は子どもに戻るべきである」と書かれていることにとても共感した。

「これまでの教育は、子どもを大人へと成長させる過程として理解されてきた。しかし大人になることが、自分を何よりもひとりの裸の人間として捉えることから離れてしまうことがあるなら、それほど危ういことはない。すなわち、教育を、人間を子どもへと成長させる過程、子どもであること(子ども性)へ回帰させる過程として理解する新しい教育観を提示する。人間が人間のままでいることができるような教育であり、子ども性を発展させようとすることこそが教育である。」
この教育哲学者の河野教授が提示していることとコルチャック氏の主張はやはり共通していると思う。
私たち大人は子どもたちには自分の考えなんかないのではないかと考え、自分たちの価値観で判断して、頭ごなしで上から目線で、彼ら抜きで、子どもたちに対応してきている。
それは全く間違っているのであり、反対にもう一度子どもに帰り、子どもと同じ目線まで自分を転換することで子どもの本当の姿が見えてきて、彼らの思いや考えを理解することができるようになると思うのである。

「こどもまんなか」を問う 28

ひきこもる若者たちが後をたたない②
令和 5 年度文部科学省による不登校調査によると、中学校 3 年生の不登校数は 80,000 人ほどとなっている。その中で 90 日以上欠席は 55%となっており、44,000 人ほどとなる。
平成 26 年に文部科学省が行なった中学校 3 年生不登校の 5 年後の追跡調査によると、不登校の 8.4%が非就学非就業という結果が出ている。
現在 2 回目の調査が行われていて調査結果発表に関心が寄せられている。
地元での感触では、相当高い数字が出てくるものと予想している。ある市では中学校卒業生徒 12 人が非就学非就業だという。その時の中学校 3 年生の不登校は 30 人ほどだから、40%となる。
90 日以上欠席している生徒たちの 5 分の 4 ほどが非就学非就業に移行しているのではないかと考えている。
富山県では中学校不登校は 1,531 人でそのうち 90 日以上欠席は 910 人で 60%で全国平均を上回る。各学年平均すると各学年不登校は 500 人で 90 日以上欠席は 300 人ほどとなり、毎年県内で 250 人ほどが非就学非就業となっていると考えられる。
ここで 15 歳で中学校卒業ということは義務教育の手を離れていくことになり、どこにも通わず、属さないとなると、どうなっているのか、どのような日々を送っているのか、わからなくなる。
彼らへの対策はされているのだろうか。
中学校時代不登校であるので、その時に障害があろうかなかろうか福祉につなげることが大事だ。そうすれば非就学非就業になってもつながりは確保できている。教育と福祉の連携が叫ばれているが、現場はおぼつかない状況である。垣根を越えた連携の推進を願うばかりだ。

「こどもまんなか」を問う 29

障害を持つ娘を自立に向かわせる母親
ある時電話が鳴った。とても強い口調で話を聞いてほしいとのことだった。障害を持つ中学生の娘さんの母親からでフリースクールで会うことにした。
その母親とフリースクールでお会いして、お話しを聞かせていただいた。少し高めの声だったので、ドア越しにきこえていたらしく、フリースクールの子どもたちは「高和さんは大丈夫かな」と心配していたらしい。あとで私は彼らにあのお母さんのお話しをじっくり聞かせていただいていたので大丈夫でしたと伝えてみんなに安心してもらった。
母親は娘さんの自立を真剣に考えている。支援学校に通っているが、学校に通っているだけでは自立に到底つな

がらない。学校に通っている時間がもったいないと言われる。母親は娘に手に技術を持たせれば、自立できると考えて、学校を休んで、技術を身につけようと必死になっている。そのことを学校に伝えても理解してもらえない。しかし欠席が続くと不登校になってしまう。どうにかならないかと聞いてくるので、フリースクールに通うと出席扱いになることを伝えた。
しばらくして、今度は娘さんを連れて来られた。車椅子に乗ってきたが、歩くことはできる。いつもはお母さんが運転する車の後部座席のチャイルドシートに乗って移動しているようだ。
母親はバッグから英単語カードの束を取り出して、彼女に示し始めた。驚くことに完璧に彼女は答えた。「この子すごいやろう」と母親は言う。ここまでになるのにどれほど親子で血のにじむ努力をしてきたのだろうか、見ていると涙が出てきた。
母親は言う、「この子は頑張ってきた。」ここまで上達するのに朝から晩まで時間を惜しんで毎日毎日やってきたんだと。
今は中学部を終えて、高等部に在籍している。訓練も朝から晩まで寝る間を惜しんで取り組んでいる。どうして高等部に在籍しているかと聞くと、娘が自立するためにはちょっとやそっとのことでは無理だ、全国コンクールで賞を取る必要があり、そのキャリアがあればなんとか自立につながる可能性がある、コンクールに出るためには高等部に所属していないといけないからだと言う。しかし、時間を惜しんで取り組まないと身につかない、学校に通う暇がない。今度も中学部の時と同じように学校に伝えても理解してもらえないと言う。
今は現状で大丈夫だと言う通信高等学校があったのでそこに在籍しているとの連絡があった。
あれからだいぶ時間が経った。なんとか自立してほしいと思う。

「こどもまんなか」を問う 30

はぁとぴあ学園では、自分が住んでいる社会で、通っている学校で、素直に疑問に思うことがあれば見てみぬふりをするのではなくやはり疑問だと親や先生に聞いたり尋ねたりすることは大切だ。またこれは間違っているのではないか、これは迷惑になっているのではないかと考える時も同じだ。と伝えています。
生きづらい社会や学校の中でいかに生きていくかが課題です。ある時はその環境から離れる、最近では逃げるという言い方も出てきています。ある時は親や先生、友人あるいは支援者に伝えて対処していく、ある時は自分に合う環境を探すということもあります。

吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」のコペル君のように
「人間が人間同志、お互いに、好意を尽くし、それを喜びとしているほど美しことは、ほかにありはしない。そして、それが本当に人間らしい人間関係だと」と叔父さんがコペル君に、君はそう思わないかしら、と問う場面は印象的だ。
また、「人間が本来、人間同志調和して生きてゆくべきものでないならば、どうして人間派自分たちの不調和を苦しいものと感じることが出来よう。お互いに愛しあい、お互いに好意をつくしあっていきてゆくべきものなのに、憎みあったり、敵対しあったりしなければいられないから、人間はそのことを不幸と感じ、そのために苦しむのだ。
人間が、こういう不幸を感じたり、こういう苦痛を覚えたりするということは、人間がもともと、憎みあったり敵対しあったりすべきものではないからだ。」と叔父さんはコペル君に語る。
ややもすると被害者意識に悩んでしまうことが多いが、本来の人間としてのとらえようを見つめ直すことによって前向きに生きていくことができることを示唆している。